



よつばつうしん

〒567-0827 大阪府茨木市稲葉町4-5よつ葉ビル4階 Tel.072-630-5610 Fax.072-630-5606
yotuba-renrakukai@luck.ocn.ne.jp http://www.yotuba.gr.jp/ 発行責任者：中川健二



青森・新農研の奈良岡さん親子

「年間予約米」別チラシは
220号・230号に入ります

「年間予約米」の一年から考える 3・11後を生きてゆくために

昨年6月号の本紙に「支えよう 東北の米づくり」と題した、よつ葉の年間予約米についての文章を書きました。その冒頭で紹介したのが、「朝日歌壇」に掲載された福島市の美原凍子さんの短歌でした。

産地重視の状況の中で

11年秋、収穫を迎えた福島県下の米は県が地域毎のサンプリング調査を実施し、当時、政府が暫定的に定めていた基準値500ベクレル/kgを超える米が市場に流通しないよう準備が進められていました。そして、県下各地の新米検査が行われ、500ベクレルを越えた米が出なかつたことで、「安全宣言」が発せられたのです。しかし、非常に少ないサンプリング検査による「安全宣言」はその直後出荷に向けて行われた個別検査で次々に500ベクレル以上の米が見つかり、完全に破綻してしまいました。その影響は福島県の米のみならず、東北各県産の米に

ならず、東北各県産の米に對する信頼を、一挙に突き崩すこととなったのです。よつ葉が『ライフ』で企画している米については、11年産の新米に移行する段階で、全産地、全品種の米について放射性セシウムの含有検査を実施しました。12月にお知らせしたように、検出限界1ベクレル/kg前後での検査結果は、全ての米から放射性物質は検出されずとなりました。

それでも、西日本産の米に比べ、東北各県産の注文数には顕著な減少傾向が現われ、その傾向は今も続いています。よつ葉は農産物全体について、可能な限り、生産地、生産者を1対1で特定し、カタログで案内する姿勢を貫いてきました。その姿勢が、会員の皆さんの信頼を深めてきたと考えています。しかし、原発事故以来、放射能汚染をできる限り避けたいという、家族の未来を思う会員の皆さんの思いが、農産物選択の判断基準の中で生産地域を重視する状況を生み出しているように感じます。食べものが持つ価値が、福島から産地がどれほど遠いか

CONTENTS

- 2面～3面 生産者紹介
- 4面 加美長沢保育園
- 5面 原発再稼働反対申し入れ
- 6面 岡田浦漁港漁業体験交流
- 7面 幕内秀夫さん
- 8面 祝島たより ほか

分断と対立を越えて

で、12年産のよつ葉の年間予約米の話に、ようやくたどり着きました。11年産の予約米で、その受注数が振るわなかつた山形・おきたま興農舎の「コシヒカリ」と「つや姫」、青森・新農研の「あきたこまち」を12年産ではなんとか回復させたいと臨んだ、『ライフ』110号からの予約米受注は、予測どおりというか、やはり、東北産3アイテム全てが前年注文数をも下まわる結果となつてしまいました。で、考えて、考えて、考えました。そして巡り着いた結論は、これは会員の皆さん一人ひとりの選択、判断なのだから、当然、受け入れるしかないものだろうものでした。だいたい、

地域・アソシエーション研究所 設立10周年記念シンポジウム

地域・アソシエーション研究所は2002年、関西よつ葉連絡会の活動を基礎に、その歴史性や普遍性を追求する目的で設立され、今年で10年を迎えました。区切りの年に以下のとおり、研究所のこれまでの活動を振り返り、これからの10年を考えるシンポジウムを開催します。

シンポジウム：「生産・地域から、 変革・未来を展望する」

【パネラー】祝島（山口県）、アグロス胡麻郷（京都府）、しらたかノラの会（山形県）

日時：5月20日（日）13:30～17:00
場所：ホテル阪急エキスポパーク（大阪モノレール「万博記念公園駅」下車）

参加費：無料
お問い合わせ：072-630-5607
local-associa@group.email.ne.jp

この手の話を、機関紙を使って会員の皆さんにウダウダ結果報告すること自体、ちよつと筋違いと言っか、違つたとウスウス感じているのです。そんな結果については、カタログをつくって、販売を呼びかけている側の問題であつて、会員の皆さんに、何ら瑕疵はないのですから。と同時に、この結果について、東北の米農家の皆さんにも、何ら瑕疵はないものだという点も、押さえておくべきだと思ひます。そして、彼らには、生産地を選択する自由すらもないのです。ただただ、双方の間に重くのしかかつている現実、日本の国にこれから生まれてくるであろう未来の子どもたちに対して、私たちは等しく大きな禍根を残してしまつたという事実です。この不条理な現実を前にして、私たちにできることは、何としても、分断、相互不信、対立だけは持ち込まないように心がけると。そして、こうした事態を引き起こした原子力発電を、一刻も早くなくすよう政府に働きかけること。そして、よつ葉は一層力を入れて、東北の米農家の現状を訴え、食べるよ！と、言つてもらえる会員の皆さんを増やしていくこと。このことしかありません。美原凍子さんの一年を考へています。東北の米農家の一年を考へてきました。そして、自分自身にとつて、この一年はと考へています。私たちが直面している恐ろしい現実の中で、この一年、日本に生きる全ての人が、これまで忘れていた何かに気付かされたように感じます。その思いを力に変えていくためには、それぞれの一日一日の生活の中で、一人ひとりが自分で何かを変えていくしかありません。その思いを、強く持ち続けていきたいと思います。（よつば農産 津田道夫）